

## 51 古代日本に於ける呪術医療の

### 思想的基盤

稻垣直

古代日本に於ける呪術医療の歴史を(一)未開時代、

(二)搖籃時代、(三)成熟時代とに分けて見る。

(一)未開時代のそれは原始的な民族固有の神祇信仰に基づいて行われたと推測されるのであるが、日本の場合、既に大陸からの陰陽道及び道教の影響を受けていたと考えられる。

(二)搖籃時代は六世紀の仏教伝来以降であり、この時代には仏教による呪術医療即ち仏呪が大きく採り上げられるようになる。その代表的なものは看病禪師の出現である。

しかし仏呪のみならず、この時代には道教による呪術医療即ち道呪も並び行われたのであり、この方面では呪

禁師の登場を見る。

此等の呪術の思想的基盤は、仏教に於いては雜部密教(雜密)であり、道教の場合は民衆道教であるが、更にその背景を成すものは陰陽五行思想と宿曜道であった。

然るに我が国の律令政府は道教忌避の方針を採り、その為、教団道教は日本に渡来せず、爾後、民衆道教のみが形を変えて断片的に、各方面に影響を及ぼして行く様になる。

(三)成熟時代は九世紀初頭に空海が純正密教(純密)の思想体系をシナ本土から将来して日本真言宗の基礎を確立して以来であるが、一方、天台宗にあつても円仁その他が密教の輸入に努力して、ここに真言宗(東密)、天台宗(台密)両者による修法が呪術医療の主軸となった。

ただこの場合、注意して置く可きは、疾患治癒のみを目的とする特定の加持祈禱がある訳ではなく、その修法の目標が病氣平癒である場合、それは治病の為の修法となるとする考え方が原則的であつた事である。然し長年月の間には自ら一定の傾向を生じ、延命法、不動法などがよく行われた。

そしてこの時代には更に、陰陽道と宿曜道との習合に

よつて各種の星宿信仰が成立する。即ち天上の歳星（木星）、熒惑星（火星）、鎮星（土星）、太白星（金星）及び尾星（土星）を基とし、之に陰陽の消長による歲月・日時・方位の変化を加味して、十干（甲より癸）と十二支（子より亥）の組合せを案出する複雑な占星術的呪術が行われる様になる。

一方、宿曜道は、本来、古代インドの天文曆学であるが、七曜・二十八宿と人の生日との関係から一生の運命を卜知し、日々の吉凶を判じ、また、星宿を加持して攘災招福を願うものである。宿曜道は既に奈良時代の雑密に於いても行われたが、平安期に入つて一層旺となり、上記陰陽道と交流し合つて、生年月日の干支と星宿の運命から個人の運命吉凶を占い祈禱する各種の星宿信仰が発達した。

かくして陰陽道の本命日から更に本命星・本命曜・本命宿などの諸概念が生れ、又、本命星に対立する六辰星の考え方も生じ、星宿信仰の内容は益々複雑になるが、北斗七星の中の本命星を供養して息災延命を願う星供は「北斗法（北斗供）」であつた。

星宿信仰とともに平安貴族の精神生活に大きな影響を及ぼしたものに怨霊の存在がある。それは多くの場合、政治的抗争の敗者であり、最初は流行病の形を以て民衆を苦しめたが、次第に物恠ものおびとして政争の対立者及びその縁者にとりついて病苦不幸を与える様になり、修法による調伏がその対抗手段と目されるに至つたのである。

顧るに、日本の呪術医療の基盤は古代に於いて形成され、その内容も十分に発達したのであつて、中世以降は惰性的に存続したと云つてよいのではなからうか。勿論、古代には貴族の占有物であつたものが、武家社会、更に一般庶民層に波及して行く時、それなりの変化を示した事実は認識されねばならない。

（東京大学第三内科）